

## 『サイエンスカフェ』 in 文部科学省情報ひろば

主 催 : 日本学術会議、文部科学省  
日 時 : 平成27年7月24日(金) 19:00~20:30  
場 所 : 文部科学省情報ひろばラウンジ(旧庁舎1階)  
テ ー マ : ISIL(アイシール)(いわゆる「イスラム国」)はイスラームではないのか  
- 近現代イスラーム思想史から考える  
講 師 : 飯塚正人さん(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授・所長)  
ファシリテーター : 小松久男さん(日本学術会議会員、東京外国語大学特任教授)  
参加人数 : 28名

いまや世界の注目の的となっているISIL(アイシール)(いわゆる「イスラム国」)。

彼らの出現と急成長の背景には多元的・複合的なものがあり、今世紀に限ってみても、2003年のイラク戦争や2011年以降のいわゆる「アラブの春」、とりわけシリア内戦とイラク情勢を抜きにしては語れません。けれども、このサイエンスカフェではもっと長い時間、すなわち19世紀に遡る近現代イスラーム(思想)史の観点から、なぜいま、世界の大半のイスラーム教徒(ムスリム)から「あれはイスラームではない」と非難されているISILが、ほんの一部とはいえ、ムスリムたちをこれほどまでに引きつけるのか、考えてみたいと思います。

19世紀に入って西欧諸国がムスリム諸国を圧倒し始めたとき、ムスリムのうちのある者は西欧流の政教分離に基づく国民国家の建設を目指し、またある者は過去のイスラーム解釈を再検討して時代にふさわしい新たなイスラームを産み出そうとしました。しかし、この2つの試みが必ずしも成功しない中で、1970年代以降はいわゆる「イスラーム原理主義」が高揚します。ムスリム自身が何をイスラームと考えるのか、余りに多様な主張が乱立する時代だからこそ、人々は「原理主義」のわかりやすさに引きつけられるのでしょう。思想史的に見れば、ISILはこうした流れの中で生まれた鬼子に他ならず、だからこそ根が深いのかもかもしれません。なお、話題提供者としてはこのテーマを語ることで、「なぜイスラームはわかりにくいのか」という根源的な疑問にもお答えできれば、と考えています。



### 話題提供の主な事項

#### □1. ISILの思想はイスラームではないのか

(1) 大前提 宗教会議の不在ゆえに、イスラームでは教義が確定しない(これが、イスラームがわかりにくい理由でもある)

- **イスラームには宗教会議**がないため、正統教義を決めることも、公式に誰かが誰かに「異端」(イスラームではないこと)を宣告することもない
- 「ムスリムでない」と見なされて、墓地への埋葬も拒否されるのは、当事者が六信(ムスリムなら誰もが信じなくてはならないとされる6つの信仰箇条)を

否定した場合くらい

※ ISIL をイスラームでないと決めつけることは誰にもできない…

☆宗教会議の不在ゆえに確定しない教義の例—一夫多妻のススメ？

- 「もし、汝ら（自分だけでは）孤児に公正にしてやれそうも無いと思ったら、誰か気に入った女をめとるがよい。二人なり、三人なり、四人なり、だがもし（妻が多くては）公平にできないようならば一人にしておくか、さもなくばお前たちの右手〔女奴隷を指す〕が所有しているものだけで我慢しておけ、その方が片手落ちになる心配が少なくてすむ」（クルアーン 4 章 3 節）
- 「おまえたちがいかに切望しても、女たちを公平に扱うことはできない」（クルアーン 4 章 129 節）
  - ⇒ トルコやチュニジアでは一夫多妻禁止
  - but 「神は完全・完璧。ムダなことは言わない」（一夫一婦が神の意志なら、こんなにくくだ言う必要はない。神が一言で済まさなかったのは、一夫多妻を認めつつ、妻たちを公平に扱うことの難しさを男たちに警告するためだ）という考え方のほうがいまも有力？ ⇒ 多くの国では一夫多妻を容認

(2) 「イスラム原理主義」とはなにか～背景～

- 固定刑…クルアーンに明記されている刑罰 +  $\alpha$
- 同害報復刑…同じくクルアーンに明記された「目には目を、歯に歯を」。ただし、賠償金などで替えることも可
  - ⇒ こうした刑罰も神の命令！
  - ～これを実行するには、政治組織が不可欠

☆とはいえ今日、固定刑・同害報復刑を実行しているのはサウディアラビア、イラン、パキスタン、スーダンの「原理主義」4 か国（+タリバン、ISIL）だけ



非国家「イスラム原理主義」の目的

目的 1～古典的イスラーム法の適用

cf ) **せめて法の精神だけでも…**

女性だけ罰する売春罪は欧米的、男女ともに罰する姦通罪がイスラーム的？

目的 2～1924 年にトルコが廃止したカリフ（預言者ムハンマドの代理人・後継者）制の復活  
⇒ 結果…OIC\*加盟 **57 か国の統一国家**

\*Organization of Islamic Cooperation  
（イスラーム協力機構）



### (3) ISIL のイスラーム

2003～2011 イラクのアルカイダ系**反米** (&反シーア派) ジハード組織＝当初は外国人中心の組織だったが、のちイラク人の反米活動家中心に

ポイント1: 反米はイスラームではないと言えるか？

→ 2004年の世論調査結果を見るかぎり、反米だからイスラームでないとは言えない

表1 アラブ諸国民が「テロ」と考える事件のランキング(2004年)

事 件	ヨルダン	シリア	レバノン	パレスチナ	エジプト
イスラエルによるパレスチナ市民の殺害	90%	97%	88%	96%	91%
イスラエルによるパレスチナの農地と穀物の破壊	88%	96%	83%	94%	90%
米軍のイラク攻撃	86%	94%	64%	89%	87%
イスラエルによるパレスチナ人政治家の殺害	84%	93%	80%	94%	87%
イラクでの国連／赤十字本部の爆破	48%	78%	80%	36%	61%
サウジアラビアでの外国人住宅爆破	46%	73%	82%	28%	69%
モロッコでのホテル爆破	50%	72%	75%	30%	73%
9/11	35%	71%	73%	22%	62%
トルコでのユダヤ教シナゴグ攻撃	21%	54%	59%	13%	44%
イスラエル市民への攻撃	24%	22%	55%	17%	33%
ユダヤ人入植地への攻撃	17%	16%	42%	3%	17%
イラク駐留米軍への攻撃	18%	9%	28%	9%	14%
イスラエル軍への攻撃	7%	5%	25%	3%	9%
イスラエルに対するヒズボラの作戦	10%	3%	16%	2%	7%

表2. アラブ諸国民が諸組織を「合法的な抵抗運動」と考えている割合(2004年)

組織名	選択肢	ヨルダン	シリア	レバノン	パレスチナ	エジプト
イスラミック・ジハード運動 (パレスチナ:対イスラエル)	抵抗運動	87%	95%	62%	95%	82%
	テロリスト	2%	1%	19%	1%	3%
	知らない	2%	1%	3%	0%	8%
	その他	10%	3%	16%	4%	7%
ハマス (パレスチナ:対イスラエル)	抵抗運動	87%	95%	62%	94%	85%
	テロリスト	2%	1%	19%	1%	3%
	知らない	1%	1%	1%	0%	6%
	その他	10%	3%	18%	6%	6%
アルアクサー殉教者旅団(パレスチナ:対イスラエル)	抵抗運動	88%	95%	55%	94%	86%
	テロリスト	2%	1%	19%	1%	2%
	知らない	1%	2%	4%	0%	6%
	その他	9%	2%	22%	6%	7%
ヒズボラ(レバノン:対イスラエル)	抵抗運動	84%	96%	75%	92%	80%
	テロリスト	3%	1%	12%	1%	3%
	知らない	1%	0%	0%	1%	8%
	その他	12%	3%	13%	6%	8%
アルカイダ	抵抗運動	67%	8%	18%	70%	41%
	テロリスト	11%	40%	54%	7%	31%
	知らない	3%	4%	1%	2%	8%
	その他	20%	49%	28%	21%	20%

出所)ヨルダン大学戦略研究所 『アラブの街角再訪 内側からの調査(Revisiting the Arab Street Research from Within (<http://www.mofhoum.com/press7/revisit-2.pdf>))、2005年2月

2011～2013 シリア内戦で反シーア派ジハード組織としての顔が前面に＝サウディアラビアの反シーア派キャンペーンに影響された外国人＋内戦に乗じて実践経験を積もうとする諸国の武闘派が参戦

※ この段階では、米国に「共通の敵」シーア派との戦闘への参戦を呼びかけたほど、反米色が後退

ポイント2:反シーア派はイスラームでないと言えるか？

反シーア派はサウディアラビアなどにも共通する要素

→ 反シーア派だから、イスラームでないとは言えない

2014 シーア派政権に不満なスンナ派住民の支持を得て、イラクでも急速に勢力拡大

6.29 IS 建国宣言&カリフ職復活・就任宣言

⇒ イスラーム法上、敵対するスンニー派ムスリムを「叛徒」として殺害することが可能に

＋奴隷制を復活(時代錯誤的な印象は免れず)

⇒ 英米等による空爆を受けて、人質の斬首刑執行

古典イスラーム法学に基づく、敵対するスンニー派の殺害を正当化する論理

「もしこのような叛徒の一団が、イマーム[カリフの法学上の用語]への服従を拒否し、彼らに課せられる諸義務を遂行せず、税を勝手に取り立て、独自に法を施行している場合、(中略)叛徒にたいする戦争が行われる。それは彼らが分派を作るのを防ぐためであり、正しいイマームに服従することに戻るようにするためである。」(アルニマーワルディー著、湯川武訳『統治の諸規則』、慶應義塾大学出版会、2006年、p.140)

【参考】無辜のジャーナリストの殺害を正当化する ISIL の論理

- 世界はダール・アルニイスラーム (イスラームの家：ムスリムが支配し、イスラーム法が適用される地) とダール・アルニハルブ (戦争の家：異教徒が支配する地) に二分され、両者は基本的に対立関係にある
- 「戦争の家」の住民が「イスラームの家」に入るにはアマーン (安全保障：今日的には入国ビザ) が必要
  - ＝ アマーンを持たない人間の安全は保障されない
  - ⇒ 問題は欧米人ジャーナリストが「有効な」(＝ISIL の) アマーンを持っていないこと！

cf ) 1997年のルクソール事件前に出されていた警告と同じ論理

日本が「宣戦布告」したとする主張が意味したもの：戦争捕虜に適用されるべき規則

「捕虜が異教に固執する場合には、次の四つの方法のうちのもっとも適切と思われる方法を選択する。すなわち、殺すか、奴隷にするか、身代金の支払いかムスリムの捕虜と交換に釈放するか、あるいは身代金なしで釈放の恩恵を与えるかである。捕虜がイスラームに改宗した場合は、死罪は除外され残りの三つの方法から選ばれる。」(アルニマーワルディー『統治の諸規則』、pp.317-318)

□ 2. 一部のスンニー派ムスリムが「イスラム原理主義」に惹かれる理由

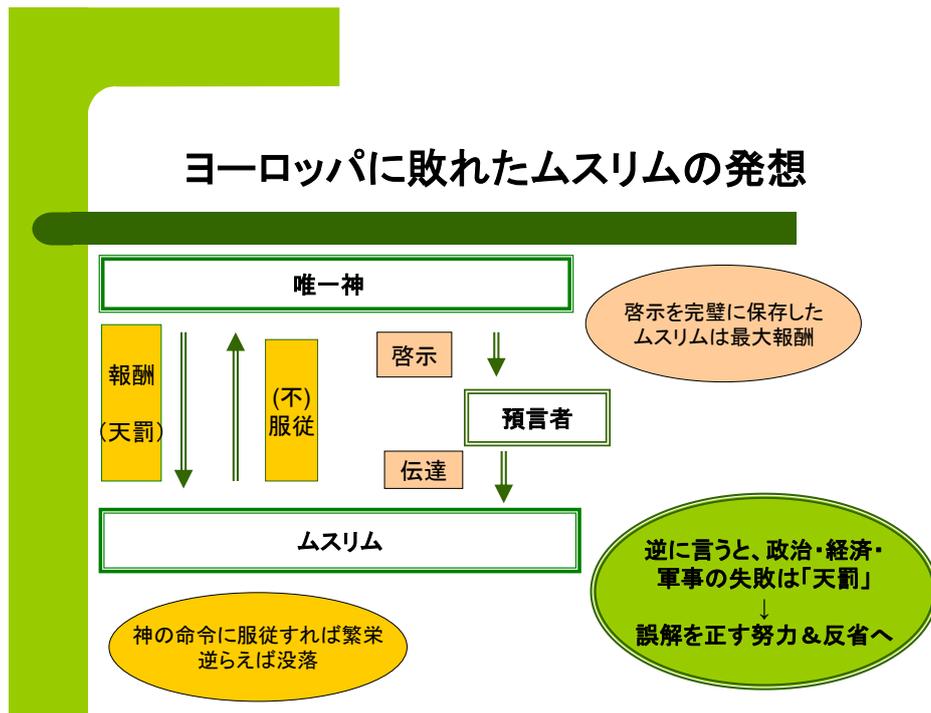
「なぜムスリムが負けたのか？」という問いへの三種類の答(19世紀末～20世紀前半)

- a) 神の意志を **勘違いした罰** ～ 「真のイスラーム」を発見しよう  
⇒ イスラーム解釈の革新へ
- b) **サボった罰** ～ 反省して真面目にイスラーム法に従おう  
⇒ 「イスラム原理主義」へ
- c) 近代ヨーロッパのように **政教分離をやらなかったから**  
～ 公言はできないが、政教分離を進めよう

☆実際に力を持ったのは、ヨーロッパ化したエリートが推進した政教分離。ただし、国民の反発が恐いので、政教分離さえも「真のイスラーム」と主張（**宗教の政治利用**）！

→ いい加減過ぎるイスラーム解釈や、なし崩し的な政治利用に閉口して憤ってもいるムスリムにとって、クルアーンの文言に忠実な「原理主義」がまっとうなイスラームに見えても不思議はない。それが ISIL のように、時として時代錯誤的なイスラームであったとしても。

図1 ヨーロッパに敗れたムスリムの発想



出所) 飯塚先生ご講演資料より

真摯なイスラーム解釈の革新 (例)

ムハンマド・アブドゥフ (1849~1905) の新たな女性論

- 女性の地位向上こそ真のイスラーム  
★問題は過去のイスラーム法学者による法解釈
- 夫による一方的離婚や一夫多妻制を戒める『クルアーン』の章句を軽視してきた従来解釈は誤り
- 女性の教育、就職、戦争参加、統治を明確に禁止する文言は『クルアーン』に存在しない

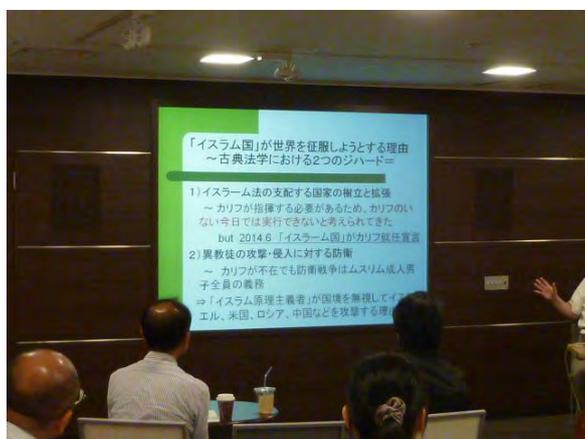
【参考】イスラーム主義 (「近代化」を経たうえで、あえて選択された思想)

「イスラーム主義者とは、早いところでは十九世紀後半から開始された西洋主導の「近代化」(多くの地域では「植民地化」という形をとった)の流れを十分に意識し、それからの影響をさまざまな形で被りながら、それでもあえてイスラームをみずからの「政治的」イデオロギーとして選択し、それに基づく改革運動を行おうとする人びとをさす。」(大塚和夫『イスラーム主義とは何か』岩波新書、2004年、p.11)

(参加者の皆さんとの質疑応答・意見交換の一部を紹介します)

(◆—参加者、○—講師、ファシリテーター)

◆—大変色々なお話ありがとうございました。お話の途中で、5年後のISILのあり方として、イベリア半島から、バルカン半島から、昔イスラームが支配できなかった所へも勢力を広げたいと画策しているという話がありましたが、さらにその後というのは、彼らには何かビジョンがあって、時にイスラーム政府なんて言われていますが、本当にそれを考えているのかということと、それは彼らが本当にそうしなければならないと考えているのかについて考え方を教えて下さい。



○—ちょうど「イスラーム国が世界を征服しようとするのはどうしてですか」というご質問も事前にいただいておりました。古典イスラーム法学では2つのジハードを規定していきまして、ひとつが「1) イスラーム法の支配する国家の樹立と拡張」を目的とするもの、いわば侵略戦争ですね。そしてもうひとつが、「2) 異教徒の攻撃・侵入に対する防衛」(防衛戦争)です。アルカイダなんかは、最初の侵略戦争の方はカリフが指揮する必要があるために、カリフがいない今日では実行できないと考えておりました、実際彼らがやって

いるつもりなのは防衛戦争の方です。ただ、我々の考える防衛戦争と彼らの考える防衛戦争は違います。例えばイスラーム教徒はスペインをおよそ700年に渡って支配しておりましたので、あそこももともとイスラーム教徒の土地なのだ、その後キリスト教徒に取られたので、そこを取り返すのも「防衛戦争」だというのがアルカイダの考え方です。スペインとしては当然納得できないと思いますが、そういう考え方はアルカイダやISILに限らず、「イスラーム原理主義者」の多くに共通するもので、イスラエルの場合であれば、武装した異教徒であるユダヤ教徒が「イスラームの家」であるパレスチナを不当に占領しているという理由でイスラエルと戦う。アメリカの場合にはアフガニスタンやイラクに駐留していましたが、これを攻撃・侵入とみなして戦う。ロシアの場合はチェチェンとかダゲスタン、中国の場合は新疆ウイグル自治区が不当に占領されているという理解になるんですね。東ヨーロッパ、バルカン半島、スペインまで、彼らにとっては不当に占領されている土地なんです。ところで、今のご質問はこれらを踏まえて、なぜISILが「侵略戦争」をしようとしているのかということですが、もともと古典イスラーム法学が侵略戦争を正当化した理屈というのは、一番最初、預言者ムハンマドはものすごく迫害されて、自由に礼拝もできなかったために、武力に訴えてでも、イスラーム法が支配する、自分たちが自由に宗教活動ができる国を樹立しなくてはならなかった。だから、アラビア半島で戦争をしたんだということなんです。実際にはイスラーム教徒は、そこから始まってスペインにまで攻めて行っている。この(侵略の)発想をわかり

やすく言うと、「平和のためには戦争が必要だ」という、いわばアメリカとよく似た発想なんです。つまり、イスラーム教徒は最初、「世界を全部イスラーム教徒が支配してしまえば平和が来る」という発想で動いた。ところが、彼らがスペインまで行ってみて気づいたことは、何しろこれ、今から千数百年前の話ですから、ここまで版図が広がってしまうと、それをまとめて一つの国にするのは大変だという現実だったわけです。さらに、イスラーム教徒はフランスまで攻めこんで、そこで敗れるのですが、実はその後も、行こうと思えば何度でもフランスに攻め込めたはずですが、でも、行くのをやめた理由は簡単で、スペインのピレネー山脈を超えた向こう側は「寒い」んですね（笑）。それもあって、この辺でいい加減、イスラーム教徒が世界を統一支配するのは事実上無理だと、実のところ、みんなが考えるようになったんじゃないかと思います。それとはまた別の理由で、今日ではイスラーム教徒が全世界を支配するなんて話は現実的じゃないと、大半のイスラーム教徒が思っていることでしょう。でも、とにかく ISIL というのは、まったく時代錯誤だと思うのですが、初期のイスラーム教徒たちが考えていたような「戦争して世界を自分たちが支配してしまえば、そのことによって平和が訪れる」という発想なのです、きっと。今日にひきつけて考えると、別の話題になりますが、20世紀末以降世界中でイスラーム教徒が殺され続けているという認識が「イスラム原理主義者」には共通にあります。このために彼らは、放っておいたらムスリムが殺される・攻撃されると考えています。それで、「いずれ攻撃されて、平和が崩れて…」となるくらいなら、「自分たちが世界を征服して、世界をイスラーム教徒の支配下に置いてしまえばいい。信仰の自由の観点から、税金を払いさえすればキリスト教徒はキリスト教を信仰しても良いですよ」というふうにするほうが良いと ISIL は考えているのでしょう。これは、ISIL がそう言っているというよりは、古典イスラーム法学の発想に基づくお答えなのですが、おそらくそういう理屈だろうと思います。

◆—世界を全部イスラーム教徒が支配すれば、イスラーム教徒は安全だ、という理屈は分かりました。ただ、他の宗教でも世界的に布教していこうという動きがある中で、平和的にみんながイスラーム教徒になるようにするやり方もあるはずですが、そうではなくて「支配しよう」という発想になるのは、虐げられてきた歴史やそういった背景があるからでしょうか。

○—それはまた別の話題になります。これもまた、日本では誤解されているのですが、もともとイスラームは、他人をイスラーム教徒に改宗させて、それで信徒を増やそうとした宗教ではありません。イスラームは、基本的には子供を沢山作ることで増えようとした宗教です。例えば、平凡社の『イスラム事典』の最初にある総説を読んでいただくとわかりやすいと思いますが、初期のイスラーム教徒はもともと、自分たちは必ずしも多数派でなくて良い、異教徒が沢山いて、税金を払ってくれる方がありがたいという発想に立っていました。最初の頃、イスラーム教徒になりたいと言い出したのはイラン人でしたが、イラン人がどうすればイスラーム教徒になれるのか、実はアラブのイスラーム教徒自身が分かっていなかったのです。結局、男性の証人2人の前でアラビア語で「神は唯一で、ムハンマドは神の使徒である」と2回唱えればイスラーム教徒になれるということに落ち着きましたが、このやり方が概ね固まるまでに数百年かかっています。この数百年の間は、実はどうすればイスラーム教徒になれるのか、イスラーム教徒自身がよくわかっていなかった。ですから、彼らのもともとの発想としては、とにかく子供を沢山作ろう、産めよ増やせよということで、世界中をイスラーム教徒にするというよりは、イスラーム教徒が世界を支配して、それぞれの宗教の信徒はそのままで良い、それ

で税金を払ってもらって自分たちが特権階級でいた方が良いという、そういう考え方があったと思います。ですので、「虐げられたから」というよりも、むしろイスラーム教徒が支配して、異教徒はイスラーム教徒にならなくて良いという考え方が最初にあったということでしょう。

◆—2 つあります。一つ目はカリフの話で、宗教会議がないために異端の区別がつかないということでしたが、カリフを認めればその人が決められるのかということと、なぜ「イスラーム国」に世界から若者が集まるのかを理解したいのですが、ヨーロッパに遅れを取ってしまったというスライドを見て、やはり貧しいところから下克上というか、何とかこの状況を回復したいと思って人が集まるのか、この2つを教えてください。

○—カリフというのはずっと立派な指導者として続いて来たかのように喧伝されていますが、実態としては、「正統カリフ」と呼ばれる最初の4人が選挙で選ばれた後のウマイヤ朝やアッバース朝では世襲でした。それで、こういう話は必ずしも歴史的な実証が十分にできないので、あくまでも私見としてお聞きいただければと思うのですが、地中海を挟んでローマ・カトリックの宗教会議があるわけですから、普通であれば宗教会議を作ろうという考え方がイスラームに出てきてもおかしくはなかった、と私は思います。ところがイスラームは宗教会議を持たなかった。その最大の理由は、この王朝化してしまったカリフ、実際にはカリフを名乗る「王」ですが、この王たちが宗教のことに口を出すと、イスラームがとんでもないことになってしまうとイスラーム法学者たちが危惧した結果ではないか、と。ローマ・カトリックの宗教会議を作ったのは実際にはローマ皇帝で、ローマ皇帝が色んなことに口を出すわけですが、それをやりはじめると宗教がねじ曲げられてしまうとイスラーム法学者たちは考えた。だから宗教会議を作らなかったのではないかと私は思っています。実際の歴史としては、アッバース朝の時代にカリフがまさに教義に口を出そうとして、イスラーム法学者たちが猛烈に抵抗し、そのために迫害されて、投獄されてしまう大学者まで出てくるのですが、結局そのような戦いの帰結として、カリフはあくまでも行政の長であり、イスラーム法や教義に関することはイスラーム法学者が決めるという住み分けがなされるようになりました。ですから、仮に今後、イスラームに宗教会議ができて、異端や正統を決めることになっても、行政の長に過ぎないカリフは基本的にそこには介入できないと思います。

もう一つ、なぜ若者が集まるかですが、これは難しい問題です。むしろイスラーム思想だけでは収まらなくて、もっと社会的な色んな問題がおそらくあるんですね。私は「9.11」以降、ヨーロッパや北米、オーストラリアのイスラーム教徒の意識調査を継続的に行ってきましたので、それで何となく雰囲気としては分かるのですが、自分たちはヨーロッパなりアメリカなりオーストラリアで生まれたけれど、「就職」となるとやはりそれなりに差別があると感じている若者は少なくありません。また、特にアメリカの場合、イスラーム教徒は普通のアメリカ人に比べてもの凄く国際情勢に詳しいんです。というのも、彼らが中東情勢等についてネットやニュースでよくフォローしているからで、「ちょっとアメリカのこのやり方は間違っているんじゃないか」と思うこともあるに違いないのですが、それを口にする、言わば「非国民」的な扱いを受ける時代が特に「9.11」以降ありましたので、そのことに対する不満もあるんじゃないでしょうか。さらに中東に関して言えば、貧困もさることながら人口爆発が進行して、若者の失業率が高いという現実があります。しかも、ある程度高学歴の人間ほど就職できないという状況で、失業していると結婚もできません。果たしてここで申し上げるのが適切かどうか分かりませんが、中東諸国には日本で言うところの風俗産業なんてありませんから、

結婚をしていない若者のストレス、欲求不満はよりいっそう大きくなります。そういう現実の中で、ISIL は生活だけでなく、花嫁の世話までしてくれるわけで、そういうところも若者を惹きつけるのかもしれませんが。それから、ISIL に限らず、「イスラム原理主義」の武装闘争を行っているグループ一般に言えることですが、最初は防衛戦争をやってくれるヒーローだとかジハード戦士だとかいうことで、地元住民に歓迎されます。加えて、内戦をやっているところでは彼らの武力も重要なので歓迎されますが、こういう組織は武装していますから、そのうち自然に、一般市民も逆らえない暴力団的な組織に変わっていきます。これは断言していいと思いますが、人間は墮落しやすい生き物ですから、多くの場合そうなります。それで、そういうふうになった時、新たにそこに入って来る人間の中には、実は単にももの凄く暴れたいだけとかいう種類の間人もいるわけで、国境を超えて、世の中に不満があるような人達が集まってくるのです。このように、この問題は色んな要素が絡みあっているので、簡単には説明できません。言い換えれば、これに関しては、欧米とか日本の社会における色んな矛盾を語れるような講師の方がお話しなさるのが適切だろうと思ひまして、今回はあまり語らないことにさせていただきました。



◆—最初の方の資料の文脈では「神はムダなことは言わない」とか「完璧である」とあります。でも、途中途中ではキリスト教圏に負けた理由として「勘違いしたから」とか「何百年か経ち法律が時代錯誤となったから」というようにあります。最初から勘違いを引き起こすようなことを言う神は完璧ではないのでは、また、時代錯誤する法律のように、古びるといふのは神の行為として相応しくない、イスラーム教徒でない人間としては思うのですが、それはどのように辻褄を合わせているのでしょうか。

○—大変素晴らしいご質問です。神の命令・啓示として、ムハンマドが聞いた内容を人間の言葉を一切加えずにそのまま記録したのがクルアーンという聖典です。これは岩波文庫で三冊です。世界の名著に入っていますが、読み物として見たら、これほどつまらない本はないでしょう。私は商売ですから読みますけれど、基本的に神様が人間に命令していることばかりですから、言わばストーリー性が無い。物語じゃないんですね。「親孝行しなさい」とか、何回も繰り返される命令もありますが、それは重要なことだから。それでいて、他方ではクルアーンに書かれていないことがたくさんあります。わかりやすい例としては、「原発」です。クルアーンには原発のことなんて出てきません。当たり前ですね、1400年前ですから。それに、地理的な制約もありますので「ぶどう酒は飲んではいけない」とされていますが、日本酒や焼酎については触れられていません。だから、これは不完全・不十分な聖典ではないか。私もそう思ったことがあります。私はイスラーム教徒ではありませんが、クルアーンに原発や日本酒・焼酎について書いてあったら、これはもう間違いなく本物の神様だと思ってイスラーム教徒になるのに、とか以前は思っていました。しかし、これに対するイスラーム教徒の回答はというと、「お前は馬鹿か。いいか。今から1400年前に、預言者ムハンマドがアラビア半島のそこら辺にいる普通の人間に『原発がさあ…』って言って通じるか？通じるわけないだろ。「原発が」って言われても、聞いている方はわかんないだろ。聞いている方がわからないという

ことは、このムハンマドって男は何を言っているんだ、変なやつだとしか思われぬ。そうしたら、聞いているほうは神のメッセージを受け入れようなんて気にならないじゃないか。だから、クルアーンに書いてないからと言って、神が完璧じゃないって話にはならないんだ。たとえば、我々は、不倫は死刑だとか、窃盗で左手首を斬るだとか言われると、刑があまりに重いように感じてしまうけれど、1400年前の人権意識と今の人権意識は違うんだから、当然、当時の人間の受け止め方は違っただろう。逆に不倫は罰金だ、と当時の人間に言ったら、ずいぶん軽い刑、軽い罪だと受け止められたに違いない。つまり、問題は人間のほうにあるんで、神は1400年前の人間が聞いたって分からないことは言わなかっただけだ。原発のことを言わなかったのは神が不完全なんじゃなくて、人間が不完全だったからなのだ。それが分からないお前は馬鹿だぞ。」ということでした。

◆—お話ありがとうございました。ジャーナリストの殺害を正当化する ISIL の建前として、レジュメ 2 枚目の下の方に書いてあると思います。ここでは、要は、イスラーム法が適用されてムスリムが支配しているところと、異教徒・それ以外ということで、基本的には対立関係と書いてあります。門外漢ですが、私の理解では、時間軸的にはイスラーム教はユダヤ教の後輩であるし、異教に対して寛容である。それに加えて、イスラームの根本的な教えで「旅人には親切にしなければならない」というのがあると思います。そうになると、いろいろ矛盾があるのではないかと思ってしまうと、それに対する ISIL の反論であったり、それを凌駕する言い分というのはなにかあるのでしょうか。

○—このご質問にきちんとお答えしようと思うと、いくつか順を追ってお話ししなければなりません。まず第一に世界は 2 つに分かれているという話（ダール・アルニイスラームとダール・アルニハルブ）は、そもそもイスラーム教徒が支配する地域にキリスト教徒やユダヤ教徒が居てはいけないという話ではありません。ただ、2 つの世界は対立しているわけですから、簡単に言えばダール・アルニハルブからダール・アルニイスラームに入ってくる異教徒にはスパイの可能性があるということです。他方で、イスラーム教徒が支配している世界にも、例えばエジプトであれば総人口の 10%、シリアであれば 15% という数字でキリスト教徒が住んでいます。この人達に関しては、基本的に税金を払ってくれれば信仰の自由を認めて、ムスリムとほぼ同じ権利でやっていくんだと。つまり、異教徒だから敵視するというのではなくて、すでにイスラーム教徒の支配を受け入れた人々については、税金さえ払ってくれば安全は保障しますよという世界なんです。ジャーナリストのケースは、そういう人達とは異なって、異教徒が支配する、対立する世界からやって来た。その場合は安全保障をしないとダメだよと。さらに詳しい話をすると、安全保障をした人間に、「国として」安全保障をすることは限りません。もし私が ISIL の一員だったとして、ある人間の安全を保障したら、その人間の安全を保障する義務は「私に」あるので、同じ ISIL の別の人間が「私が安全保障をした人間」に危害を加えようとした場合、私は全力でそれを阻止するために戦わないといけないのです。要は、旅人を大切に取扱えよというの、誰かが安全保障していることが大前提となっているわけです。

◆—先ほどあった質問の兼ね合いなのですが、1400 年前は原発がなかったからそういう話はしなかったと。その後こうして 1400 年経ったのですから、本当に神がいるのだしたら、もう新しい預言者が来て、日本酒の話も原発の話もするし、ということがあってもいいように思うのですが、そのことについてイスラーム教徒達はどのように考えてい

るのでしょうか。

○—実はクルアーンの中に「ムハンマドは預言者の封印である」という言葉があって、イスラームでは預言者はムハンマドで終わったということになっています。イスラームで異端が宣告されることは滅多にありませんが、極めて稀に、異端扱いされる人々がないわけではありません。もちろん、宗教会議がないため、正式な宣告ではありませんが、各国がこれは異端だということで、いくつか問題にしている宗派があります。実際には2つくらいですが、要するに「自分は新たな預言者だ」と言って、誰かが新しい宗派・宗教をはじめた。その宗派・宗教が異端扱いされて、それこそ国によっては死刑になったりすることがあります。

◆—イスラーム研究者として、今後 ISIL の動きはどのようにお考えでしょうか。

○—今回の講演では時間が短くて申し上げませんでした。それについては、どうして ISIL がここまで大きくなったのかを考えるとおのずから答が見えてくるんじゃないでしょうか。ISIL というのはシリア内戦で大きくなりましたが、これはシリア内戦時に彼らを支援する国があったからです。そして、シリア内戦が終わったからといって、シリアが簡単に一つの国に戻るとは思えない。一方イラクの方でも、なぜ彼らがこんなに伸びたかという、完全に前のシーア派政権の失敗です。スンニー派の住民は、シーア派の民兵とイラク政府軍が来るくらいなら、ISILの方がまだマシだと言うくらい、イラクの政権を嫌っていたわけです。シリアでもイラクでも実際には、それぞれの国の政府の失敗が大きくて、イラクもまたシリア同様、今後簡単にまとまるとは思えない。私は ISIL がこれ以上大きくなるとは思ってなくて、いずれ尻すぼみになると考えていますが、ISIL が滅びた後にシリアやイラクが落ち着くかという、そう簡単ではないでしょう。ISIL が滅びたとしても、それに代わる組織が出てくるでしょうし、ISIL の思想はサウディアラビアとそれほど変わりません。違うのはサウディがカリフを志向しないという点だけで、理由は簡単。サウディの王様にはカリフになる資格がないからです。カリフになるためには、ムハンマドと同じクライシュ族でなければなりません。サウディの王様はクライシュ族ではないために、カリフにはなれません。カリフが立ってしまうと、そちらの方が上になるので、サウディとしては ISIL を認めることは絶対にできませんが、思想的には似たようなものですから、今後また ISIL のようなグループがでてきた場合にはおそらく支援するでしょう。ISIL がこれ以上大きくなることは考えられませんし、いずれ消滅すると思いますが、その後にはやはりイラクとシリアで似たようなグループが出現して、状況はなかなか好転しないだろうと考えています。

ファシリテーターから \* \* \* \* \*

本日は、イスラームの思想や教義の深みから、現代の ISIL の問題にまでアプローチして下さいました。

ISIL に関しては、軍事的な情勢はどうなっているとか、国際政治の方面から見るとどうなのかとか、さまざまに議論されることが多いのですが、今日はイスラームの中に内在する論理や解釈をふまえて、具体的に説明していただいたように思います。

これを一つの機会として、イスラームに対する理解を深めていただければと思います。  
\* \* \* \* \*